

第一部 労苦体験記

中 支

戦争体験記

福島県 新田 善松

私は昭和六年徴集現役兵として、朝鮮国境恵山鎮守備隊第一中隊要員として感興歩兵七十四連隊に入隊した。六月二日国境に匪賊が出たとのことで除隊式寸前の満期兵のうち、上等兵のみが分隊長要員として除隊延期となり、小生ら初年兵とともに自動車で夕方恵山鎮に到着した。

兵舎に入る前に整列、中隊長訓辞、銃剣と実弾三〇発

を支給され、夜鴨緑江を渡り、長白県長白府から帽子山（モールサン）街道を西進、匪賊討伐に参加した。

それから班長も戦地に出動中、下流二〇里くらの所に新賀波鎮守備隊があり対岸は十三道溝（満州）に出動勤務。我らの仲間は全部青年学校終了者のみのため一年半で帰休、除隊した。

そのときの珍話を一つ。それは私が週番下士官を勤めていた時のこと、零下四二度でしたが、部隊の下肥汲取り人である朝鮮人は鋸、おの、ハンマー、南京袋、軍手、箆及び天秤棒を持って便所の中に入り、エベレスト山のように高くなった糞を立ち木を切るように、おので根回しをし、鋸で切って箆に入れ、粟畑や豆畑に運んでいた。

兵舎内はオンドル式の暖房で窓のガラス戸は紙を字形に張っておくが、外気が零下四〇度余もあるので、我々の息がガラスの内側に凍りついて、一〇センチくらいになる。小便も凍るなどの話があったが、出る途中で凍ることはなかった。でも行軍その他で外を歩く時は、常に目をこすらなければ出る息が凍って目が見えなくなる有様。上下のまつ毛がついてしまうのです。また銃をかついで雪が積桿についた際、口で吹き下ろす時、間違つて唇が積桿にさわつたら唇の皮がむけてしまう寒さだった。

珍話はこのくらいにして私の第四回目の召集は昭和十二年九月十七日。充員召集歩兵二十九連隊留守隊、同歩兵六十五連隊第八中隊に入隊した。九月二十五日屯営地出発、同二十八日大阪港出帆、十月三日上海に上陸した。陸戦隊は上海の一点のみは占領していたものの敵の追撃砲はいつも飛んできていた。その夜は日本人が経営していた東洋紡績工場に宿泊したが、南京虫がたくさんおり手首、足首及び首の回りを刺され、また時折、追撃砲の攻撃及び空襲で眠れなかった。翌朝上海を出発、口網湾に出撃し天幕露営及び陣地構築をした。夜になると

赤、青、黄色の照明弾が上がる。

上海近くにいるうちは当部隊は予備隊だったらしい。十月十日第一線出撃、魔橋頭戦において敵は猛烈に攻撃し夜に入って追撃砲の援護の下に笛や太鼓で突撃を敢行してきた。我が軍はこれに応戦したが、敵の攻撃は豆いりのようであった。軍用犬もすくんで人間の後ばかりついて回り邪魔になるぐらい。この戦場で下重准尉以下七、八人の戦死者を出した。准尉は追撃砲にやられて片足だけの戦友を背負ってきたが、その後敵弾に倒れた。

この時、小生は指揮班岡本軍曹の配下だったが、捕虜一人を納屋の柱にしばりつけ日本の煙草を吸わせ、通訳を使って種々話を聞いた。本人は香港出身の予備役召集、二十八歳とのこと。入れ歯で話するのに前歯ががくがく動いていた。そして敵は一日一人で二〇〇〇発を撃てば第一線交替になるとのことで、敵の攻撃は雨あられ、豆いり以上の攻撃であった。

小生は翌日、捕虜を連隊本部後方約八〇〇メートルの所に連行した。本部には秋州師団長、両角部隊長以下天幕の下、六尺机二個を連ね地図を広げ、肩掛金バレン姿

で作戦を練っていた。そこに現役時代の戦友、福島県田村郡川前村の根本武君が当番兵としていた。部隊長は「これからは下士官以上を捕虜にした場合のみ連行せよ」と命令した。

それからは毎日が激戦。十月二十日老陸宅の攻撃命令が八中隊に下り、それまで第一大隊が攻撃部隊であったため第二大隊長山口武臣少佐が第一線の第一大隊本部に移動した。老陸宅は西の方を目指して揚経クリークが東から西にあり、途中三か所のクリークを越え対岸が竹藪の一軒家。さらにその次のクリークの対岸が老陸宅の本陣地である。敵は火焰放射器を使っている。第三のクリークまでは、夕方工兵の決死隊により交通壕が貫通しているとのことであった。

小生は大隊長より「本日午後二時、八中隊は老陸宅に突入する。お前は八中隊が突入したらば、この信号弾を二発上げろ。そしてら第二大隊本部を老陸宅に移動するんだ」といわれ、信号弾二発をもらって中隊の来るのをまっていた。時刻は迫り友軍の飛行機が老陸宅の頭より爆弾を投下、野砲、山砲、歩兵砲と援護射撃。しかし八

中隊の兵は各個躍進で来るので七、八人しか集結しなかった。大隊長は七人でも八人でも突入しろとのことだ。小生が老陸宅に向かって進んだ。

ところが第三のクリークまで貫通しているはずの交通壕が、約三〇呎くらい残っていた。そこに出ると右前が馬家宅、左が老陸宅で双方の弾丸が頭上で交錯する。兵はほとんどここで戦死、志賀繁中隊長、小松山小隊長もともに戦死。一部第三のクリークに入った兵もあつたろう。小生はそこで老陸宅の本陣地には突撃不成功に終わったが、万止むを得ず信号弾二発を上げた。後から大隊長が前進前進と本部の兵を率いて進んできた。

その右前の機関銃陣地は友軍の陣地。前進前進と壕内にいる兵を一人一人尻を揚げて出した。小生も大隊長に尻揚げされるまで待っていられないと右側の田圃に出た。午後二時はとうに過ぎ日本の砲撃は全然なし。敵老陸宅、馬家宅の陣地からは銃眼から真赤に火を吹きながらの攻撃である。壕の右前の支那人墓地の高台には我が軍の重機の陣地があり、小生はその右側に進出、夜闇になるまで機関銃陣地をみつめていた。射手、弾薬手、全員戦死

していた。

我が軍の突撃が不成功に終わったため、敵は機関銃の銃身、弾薬箱を目標に猛攻撃。そのうち東の方大隊本部付近から横に三〇呎間隔に迫撃砲の一斉攻撃。見ていると爆発で土煙、またクリークに落下の水柱が一丈もの高さになる。いよいよ今度くる弾丸が俺の所にくると思つて頭を地に伏せていたら、小生の後方一〇呎の所に地震のような振動とともに落下した。幸いにそれが地響きだけで不発に終わった。その時はかりは神の助けかと、我が郷里村社麓山神社に合掌した。

まもなく夕方になり闇夜となる。大隊長に尻を持ち揚げられ右前に出た男たちも一人ぼっちだったのだろう。五分おきに交通壕に入る。壕内は隙間もなく満杯、そのうち第三のクリークまで交通壕が貫通して、その晩のうちに老陸毛直前の竹藪の一軒家にたどり着いた。翌朝、夜明けと同時に友軍の砲撃が始まり、昨日まで敵がいた中島、大きい樫の木があったその樫の枝が砲弾で折れ、下にいた兵士を直撃し、そちらでもこちらでもヤラッチャヤラッチャと叫んでいた。

そこへ橋本曹長が四つばいになって来た。「新田元氣

か、中隊を全部集結させろ」とのこと。小生は周辺を探したが総勢八人だけ。橋本曹長曰く「志賀中隊長、小松山一小隊長戦死。現在生存者は兵八人。それもみな血便患者でほとんど戦闘能力がないと大隊長に報告してこい」とのこと。夕方渡ったクリークに入った。戦死者がぶよぶよ浮かぶクリークの上を泳いで交通壕に到着。大隊本部へ走り報告した。そこで「中隊長、小隊長の遺体を持って引き揚げてこい。中隊は馬家毛正面の揚経クリーク側に移動した。そして今晚第六中隊と共同で馬家宅攻撃」とのこと、原田少尉が中隊の指揮をとった。その原田少尉も双眼鏡で敵状視察を始めると同時に狙撃され、目貫通で即死した。小生らは畜生と口を結び、いよいよ今晚は突入と意気込んでいた。

夜になると敵は鉄条網作りを始めた。カチリカチリと鉄線を切る音がする。一刻も早く突撃しなければ今晚中に鉄条網は完成する。即座に決死隊を作って鉄条網を切断し突破口を作らなければならない。小生も決死隊を志願した。しかし、その晩の夜襲は中止となったのみなら

ず、お前は命令受領の指揮班だからだめだと言われた。

連日の激戦続き老陸宅の突撃で中隊は大打撃を受け残兵十数人。他中隊も相当戦死者もあり部隊集結にまにあわなかったと考えられる。そして原田少尉の戦死により中隊に将校一人もなく、橋本曹長も老陸宅前の陣地で腹部貫通で一線を下りた。そして中隊長には聯隊旗手の鈴木少尉がついた。

その日、中隊長から「第一次補充として小泉少尉以下十数人が中隊に配属になる。お前迎えに行つてこい」との命令。連隊本部の方へ向かい五〇〇尉ぐらい行つたところで小泉少尉と兵たちに出会った。内地から来たばかりの小泉少尉は朝日の煙草を一本出してくれた。また白い切餅と上海付近で調達したとみられる角砂糖一個をもらって食べた。そして午後、小泉少尉を案内し中隊に帰った。

その翌朝、朝霧を利用して六中隊と八中隊に馬家宅前陸家橋に向かって突撃を敢行した。小生も大隊長の号令で突入した。山口武臣大隊長は軍刀を抜いて両手を上げ万歳万歳を叫んでいた。今まで何回も突撃が不成功に終

わっているの、大隊長も嬉しかったことだろう。その途端、敵弾がアゴから左鼻下を貫通し、大隊長は第一線を下がった。山口大隊長負傷後は現役の機関銃隊中隊長、片岡中尉が大隊の指揮をとった。この方は体は小さいけれども度胸は良く、鉄カブトは持っているが背に負って頭にかぶったことがなく、勇敢に指揮していた。

当時は一中隊で敵の一陣地を占領しなければ第一線の交替はないとのこと、この時、突撃が成功したので仙台の百四部隊と両角部隊が第一線交替とのことで百四部隊長後藤少佐が後方に来ているのに、小泉小隊が第一線に出たまま帰らない。中隊は斥候を出し探した結果、前線五〇〇八〇尉の地点で壕を掘り、内地から持ってきたばかりの餅や煙草を食して第一線を死守していた。そして我々は今度は白沼という所で予備隊として警備とのこと。翌朝、連隊会報で八中隊の小泉少尉は勇敢なる青年将校で、二日二晩食もとらずに第一線を死守していたとのことで殊勲甲になった。その後二、三日で馬家宅、老陸宅後方の輸送路を遮断したため敵は退却していった。